

紙づつ

二〇〇一年ごろのお話です。クライアントの理不尽な要求や対応に必死に耐えることで携帯電話向けのホームページ制作のお仕事も増えていき、スタッフもアルバイト求人雑誌に広告を出すなどして十二名ほどになっていました。十三坪のオフィスでは、まさに「すし詰め」状態です。新しいアルバイトの応募者が面接で来社した際に、その様子を一目見て「あ、間違えました」と帰られたことも。人数は増えていきましたが、当時のスタッフの質はさまざまでした。夕方にしか出社しない者、トイレから出てこない者、すぐ怒る者…。

ある日、母親の心臓手術の立ち会いのため会社から一時間ほど離れた

暗黒時代、引き続き。

お高生
林

病院にいたところ、クライアントから「今すぐ見積もりが欲しい」と僕の携帯電話に連絡がありました。見積書は作ってあったので、会社にいたスタッフに電話をして、それを僕の代わりにEメールで送ってほしいとお願したところ「責任がかかるので嫌です」と言われ、何度お願いしても同じ返答。クライアントに今日の夜まで待ってほしいと状況を説明しても聞いてもらえず、仕方なく病院を抜け出し、ただ見積書をEメールで送るために病院から会社まで往復することになったのです。

強引なクライアントと、非協力的なスタッフ。この関係性に挟まれ続け、僕は心身ともに疲れ果ててしまいい、「もつこの会社をやっていく意味はない」と思つようになったので

(エイチーム社長)